

駿河湾の深海魚 (16)

イタハダカ (その2)

久保田 正 ・ 佐藤 武

イタハダカ (*Diogenichthys atlanticus*) は、ハダカイワシ科魚類の中では小型種に含まれ、世界の海の温帯、亜熱帯、熱帯域の中深層に普遍的に分布しています。大西洋域では、本種の生活周期は一年で産卵は年中行われていて早春にピークがみられます。またメキシコ湾流域では夜間 200m 以浅の中深層性魚類中では、最重要種とされています。一方、北太平洋西部域における本種の生物学的知見は少なく、今後の研究課題の一つです。

ところで、魚類の脳の後方には左右それぞれ一对の3種類の石があり、一般には一番大きなものが耳石(扁平石)と呼ばれています。これは炭酸カルシウムの結晶からできている組織です。この耳石は、サケ・マス類やタイ類の鱗と同じように年輪が形成されるので魚種によってそれを数えて年齢を調べる資源学的研究に用いられています。本科魚類の耳石は、体の大きさに比べて大きくて目立つ存在で、しかも種独特の形態的特徴を有しています。

大型魚類や海産哺乳類などに捕食され、胃の中で消化されなかった耳石を調べて餌生物種の同定が可能となり、食性生態の研究に大きな貢献をしています。本種のような小型種でも耳石

は取り出し易いことが大きな特徴です(図1)。

日本近海における本種の食性生態に関する情報は少ないので、得られた知見を紹介しませう。研究に用いた標本は、沖縄南方海域において秋季から翌年の春季に稚魚ネットで 200 m 以深から得た 255 個体です。この採集で得た本種は、やはり中深層種の仲間のソコハダカ (*Bensothema suborbitale*) に次いで多く出現した種類です。

本種の餌生物は、浮遊性軟体類、甲殻類幼生、貝形虫類、端脚類、オキアミ類、かいあし類、毛顎類、尾虫類などの 8 生物群に分けることができました。さらにどの月にも出現頻度の高いかいあし類は、属レベルまで調べ、月別、雌雄別に比較しました(図2)。中でもかいあし類の体が大きい *Calanus*, *Euchaeta*, *Pleuromamma* 各属の種よりも小型である *Oncaea* 属に含まれる種の捕食が目立っているのが大きな特徴です。小型種のイタハダカは、小型のかいあし類を体の大きさに比例して捕食しています。ハワイ諸島近海からの本種も *Oncaea* 属を主体として捕食し、同じ傾向でした。このように本種の食性は、多くのハダカイワシ類と同じく甲殻類プランクトン捕食者です。



図1. イタハダカの耳石
(左、内面)
耳石長 : 0.85mm
魚体長 : 19mm
南太平洋産 (20° S, 168° E)
(Rivaton and Bourret, 1999 から引用)

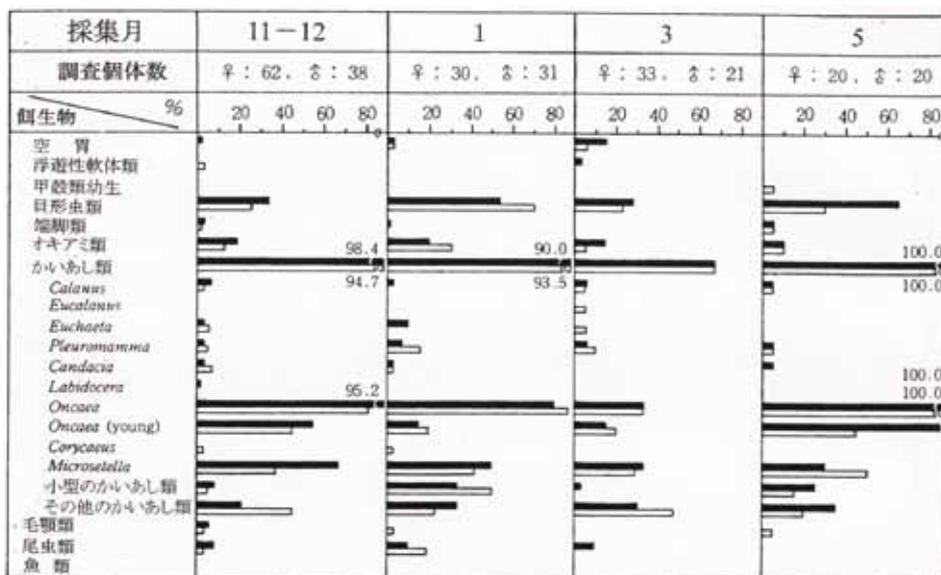


図2 沖縄南方海域から採集したイタハダカの餌生物組成の月別比較
各生物群の出現率は、調査個体数に対する値です
■ : 雌 □ : 雄